

喜多川祐介と樋口師匠との愉快的日常

丸米

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大学に進学した喜多川祐介。彼はある日、下宿先の怪人と出会う。

仙人の如き静かな佇まいの中に、何処かふてぶてしさすら感じる呑気な笑顔を湛える剽軽者——その名も、樋口。

変人×変人が織りなす不思議な師弟。喜多川祐介、四畳半のパレスに迷い込む——。

目次

邂逅	1
宣託を訊け	4
代理人はこうして増える	7
怪盗、再び	10
狐と妖怪	13
人形の美	17
相島の疑念	20

邂逅

伊勢海老が死んだ。

★ 大学二回生の夏の事だった。

★ そう、あれはいつのことだったか。

あの怪盗団の美しき日々の中で、日々俺は美しいものと出会って来た。

美しい恋情、美しい芸術、美しい激情、美しい欲望。

俺は喪われた時間を取り戻す様に、真の芸術を追い求めていた。

そう。芸術の糧が何処に転がっているかなど、簡単に解ってしまうようならば、芸術なぞ存在しないのだ。だから俺は過ぎ行く日常と非日常の中、芸術という名の路傍の宝石を探していたのだ。

それはまるで、砂漠の中から宝石を見つけ出そうとするかのようだった。砂塵の最中、彷徨っていた。

ジョーカーと共に、恋人とは何かを求めて兄弟の経過観察を行い、キリストの前で磔刑のポーズも取った。しかしてそれでも俺は芸術という名の海の中、窒息しかけていた。いつまでも見つからぬ美を求めて、俺は何処までも探し続け、疲弊していたのだ。

そんな時に——俺は運命的な出会いを果たしたのだ。

伊勢海老、二匹。

あれは、確か皆と海に行ったときであろうか。

売店で売られていた、その美しくも力強い紅の存在感に、俺は一瞬で心奪われた。

サユリを初めて見た時以来の衝撃であった。

透明な水に映える紅のフォルム。体躯に似合わぬ巨大な鋏。二体の伊勢海老がまるで寄り添うように、その身をくっつけている姿が、脳裏に焼き付いた。

——この美を芸術に昇華できぬようであるならば、芸術家を名乗るべきに非ず。

決心は早かった。

二匹とも、買った。

芸術を解さぬあの引き籠り少女に危うく喰われかけ、当時の全財産の九割を失った。しかし、それでも俺は彼等を愛した。迷いなく、俺は彼等を飼育することに決めたのだ。

彼等が脱皮する度、彼等が餌を食う度、彼等を書き留めた。正面、側面、背面。やはり俺の眼には狂いはなかったのだ。何処を切り取っても、彼等は美しかった。

彼等とは、大学に進学した後も連れて行った。

京都の風情に身を焦がされ、俺は彼等を伴い様々な場所に向かった。

京都の街並みと、彼等はひどく映えた。

彼等を京都を背景に幾度となく書く。それだけで、俺の中に在る芸術が、爆発する様に屹立し出す。

そんな日々が続いた、大学二回生の事。

彼等は、死んだ。

絵を描いている途中に水槽から逃げ出そうと暴れ出し、そのままコンクリに焼きつけられて。

実に、あっさりとした死に様だった。

★

「——貴君、何をしているのだね」

「儀式を、行っているのです——」

「ほう、儀式とな」

「はい」

「わざわざ下宿の前でコンロを出し、伊勢海老を煮込み、味噌と塩で搾え、恐らくこれから君の胃袋の中にそれらを嚙下させる行為が、かね」

「はい」

「——なにゆえ、それを儀式と呼ぶのかね？」

「彼等は、相棒だった。俺の芸術を高め、創り、時に慰め時に叱ってくれた。彼等はそこに存在するだけで、俺に力をくれていた。友であり、家族であった。故に、彼等を喰わねばならない。彼等に墓石は必要ない。俺がその身を、感謝と共に喰う」

俺の下宿先の、三つ隣の男が俺に話しかけてきた。

正直、今は誰とも話したくない心境であつた。儀式の最中、無粋にも程がある——そう思うものの、何故かこの男の声音には不思議な軽やかさがあつた。それはまるでそよ風の様だ。絵を描く時にも、儀式の最中にあつても、軽やかに吹き付けるそよ風に不機嫌になることなどないように、男の声はこの世界と調和していた。

「ふむ、成程——貴君、中々面白い。どれ、私も食つていいかね？」
「貴方も——？」

「そうだとも。君は彼等を感謝故に食うのだろうか？ならば私も、彼等を感謝故に食べよう」

「貴方が、彼等に何を感謝するといふのですか？」

「今、こうして君と出会えたことに対して。貴君は見るからに面白い。そういう縁を偶然にも拾つた時には、普段は信じぬ神にも感謝の念を払う事もある。そして、今私と君を結び付けた事象は、その伊勢海老だ。故に、私は彼等に感謝したい」

「そうですか——」

「ああ、そうだ」

そう言うと、彼は何処から持参したのやら箸を握り、一つ手を合わせて彼等を食い始めた。

恐らくは、相当な大食漢なのだろう。箸を使う手さばきでそれは見て解る。

しかして彼は無造作に食う事を善しとせず、静かな所作と共に彼等を口の中に持つて行つていた。

これが、俺と——下宿先の怪人、樋口との最初の出会いであつた。

宣託を訊け

私が喜多川祐介と出会ったのは、実に珍妙な場面であった。何とも奇怪な男であった。

およそその眉目秀麗な顔立ちと彫刻の如き細身の肉体は老若男女問わずその姿に見返り、そしてそこから紡ぎ出される奇行に思わず目を伏せるであろう。なにせ私がそうであった。

街中、古本店から出た私の眼前を通り過ぎたその男は切れ長の瞳に大粒の涙を浮かべながら通りを疾走していた。

——その両手に、泡を吹き絶命した伊勢海老を掴みながら。

その男の名を喜多川祐介であると知ったのはその一週間後の事であった。

喜多川祐介は、下鴨幽水荘の住人であったのだ。

★ 俺は悲しみの彼方で、ふらふらと歩いていた。

あの不思議な樋口なる男と共に飯を食らったはいいものの、それでも心に出来た空虚な穴を埋められずにいた。

樋口は「一飯の礼だ」というと、一先ず外を歩いてみるといい、とアドバイスした。

そういう訳で、俺は今夜の街を歩いている。

——美とは何だ。

問いかけても問いかけても、その解はいつまで経っても降りてこない。

飲み屋を過ぎ、風俗街を過ぎる。いかがわしいスーツ姿の男共の勧誘を無視しながら、歩く。

その夜に浮かぶ誘蛾灯の明りの軒下に、その光の当たらぬ静かな民家があった。

月光に照らし出されたその家の正面に、奇妙な老婆がいた。

一瞬、シャドウかと見紛った。

その老婆は泰然としていて、奇妙な妖気を纏っていた。幽霊屋敷の如きその民家の風貌も相まって、俺は息を飲んでその姿を見た。

——占い、だと。

その民家は、占い屋であつたらしい。木の机の前に椅子を引き、占いの看板がそこに存在している。

老婆はこちらを認識すると、こちらに笑んだ。

「ようこそいらつしやった、——怪盗さん」

「なに!!」

その老婆は、俺を一目見た瞬間——怪盗だと、そう言った。

「何を隠すことも無いのです、怪盗さん。貴方の心の奥底に、ついで消える事のない怒りが垣間見えます。叛逆の意思とでも言いましょうか。これは、大変な心持ちです」

もごもごと綿でものんでいるかの如き口調で、老婆はそう言った。

妖気が、弾けるように肥大化したかの如く感じた。

「怪盗さん、何を占ってほしいのですかな?」

——間違いない。この老婆の占いは、本物だ。

妖気にあてられたかの如く、俺は老婆に全てを打ち明けた。

——美とは、何だ。伊勢海老が死んでからの俺は、ずっとその疑問が頭にチラついていた。捕らえようの無い感覚に、苛立っているのだ。

「貴方のお顔からしますと、大変な怒りを抱えていらつしやる。とにかく、一度原点に戻るべきです。せつかく、大変な才能がおりなのに、怒りで折角の好機を逃しておいでです」

「怒り——」

「そう。怒りです。貴方は心の何処かに怒りを常に孕んでいらつしやる。怒りは大切ですが、それで貴方の眼が眩んでいらつしやる」

すとん、と心の中に何か落ちる音がした。

怒り——。

班目の裏切り、盗んできた大人たちの醜い欲望、無責任な大衆——俺はそれら全てにどうしようもない怒りを覚えてしまっていた。その怒りが、俺の心の中から色彩を奪っていたのか。

怒りとは、受け入れられぬ心だ。

何事かを拒否したい心が、怒りを生み出す。

全てを受け入れ、受容し、はじめて美を生み出せると言うのに——俺の心は、その在り方を喪つてしまっていたのか。だからだ。だから——彼等に、伊勢海老に拘つてしまっていたのだ。

過去、俺が直感的に美しいと感じたこの伊勢海老。

——いつの間にか俺は、この伊勢海老が美しいから描いていた訳じゃなくなっていた。

過去の俺が美しいと思つたから描いていただけだったのだ。

今の俺じゃなく、過去の俺。

今の俺の心がくすんでいいるから、過去の俺に縋っていた。

今全てを忘れこの街を見てみれば——こんなにも美しいものに溢れているのに。

「お婆さん——感謝する」

「では、料金を戴くよ」

「ああ。今俺の財布には1005円しかないが」

「はい、1000円」

迷う事無く俺は1000円を払った。

この晴れやかな気分の代償には安いものだ。

俺はスキップでもしたい軽やかな気分を抱えながら、四駅分ほどの距離にある四畳半のアトリエへと戻る事にした。

★

俺は、彼等の墓を建てる事にした。

俺なりの方法で。

題名、「残骸」

彼等を喰つた後の、甲羅を描いた。

何だか晴れやかな気分であった。

「俺は、お前等を忘れない」

打ち捨てられた甲羅を前に俺は一つ手を合わせた。

代理人はこうして増える

愛すべき四畳半に、唾棄すべき存在がいる。その光景はまさしく神社仏閣に紛れ込んだ芋虫の如き禍々しきである。私は眼前の妖怪もどきを射殺さんばかりに睨みつけた。

小津はいつもの如く小さく縮こまったフリなどしつつ「そんなに睨み付けないで下さいよ」などといけしやあしやあと喚きたてている。「うるさい。何故お前がここにいる」

「何を言いますか。他人からのもらい物と言えどこんな立派なお菓子を一人で食べる虚しさはないでしょう。仕方がないから僕がこうして一緒に食べているんじゃないですか。むしろ感謝して欲しいくらいだ」

小津はそう言いながら、菓子折りの中身を裁断機をかけたかの如き勢いでロクに味わう事無く口の中に放り込んでいく。その様はまさしく不愉快の権化であった。

「うるさい黙れこの偏食妖怪。何の用でここに来た！」

「まあまあ、そんな風に怒らないで下さいよ」

小津は甘ったるい猫なで声を発しながら、指を上方に持っていく。

「喜多川祐介と言うんですって、新しくここに来た人」

「ああ。今お前がせわしなく口に入れているその菓子折りもその御仁から頂いたものだ。そろそろその汚らしい口を閉じろ」

私はあまりにも無節操な小津の咀嚼に腹を立て、そのまま小津の口を摘み上げる。窒息したアヒルの様にぐえぐえと喚いて、ようやく菓子を食うのを止めた。手を離したら涙目を浮かべるも、舌先だけは止まることは無かった。

「いやあ、色々噂が立っているお人でしてね。是非とも一目見たいとこつちに来たんですがね。中々姿を現さない」

——喜多川祐介とは、まさしく謎に包まれた男である。

何処の大学に通っているのか、そもそも本当に学生なのか定かではない。何週間も家に籠りきりの時もあればひとたび外出すれば何週間もない時もある。食事に困って近くの河川敷で雑草を抜いてい

たかと思えば、こうして唐突に「引越しの挨拶が遅れて申し訳なかった」などと言いながら名産の菓子折りを届けたりもする。死んだ伊勢海老を握りながら街を走り回り、立ち入り禁止の山の中を画材道具一切を背負って侵入した事もあるという。流麗かつ端正なその佇まいは本当に同じ人間であるのか疑念を生じさせ、彼の奇行を目にして初めて同じ人間ではなかったのだと確信する。

「樋口師匠も大層気に入っているみたいで、弟子にならないかと勧誘しているけど、すげなく断られているみたいです。師匠は当分持つ気はない、ですって。昔、師匠に痛い目でもみちやったんでしょうか」「そこに関しては利口だな。師匠なんぞ持たない方がいい」

「噂じゃ、あの班目一流斎の弟子だったなんて言われているんですよ、彼」

「随分と懐かしい名前だな」

確かその名前を聞いたのは私が浪人生の頃だっただろうか。

自らの画廊と称して、実はその作品の半数近くを剽窃していたという事実を記者会見で実にアクロバティックに告白した事で有名になった男であったか。

その告白の原因となったのが――。

「怪盗騒ぎなんてものもありましたねえ。悪人の心を盗む大怪盗、なんて世間で大騒ぎになった原因ですよ」

「ふん。そんなもの本当にいるのならば、まずもってお前が改心していないとおかしいだろう」

「そんな。僕ほどに純真な心を持った男が何処にいますと言うのですか」

「どの口が言うかどの口が」

私の脳裏には、それでも――この男が改心した際の光景が脳裏に浮かび上がった。

この畜生には眩いフラッシュに塗れた記者会見場なんぞ用意されるはずもない。精々四条大橋で拡声器を持ちながら涙ながらに自らの罪を告白し罪の重さに耐えかね河に飛び降り、そしてケロリとした表情で陸に上がっているに違いない。

ああ、やっぱりこの男は改心なぞするはずもあるまい。改心する位ならばこの男は果て無き逃避行と死を選択するだろう。さしもの怪盗でも、この男の心なぞ汚くて奪いたくもないだろう。

★

「樋口氏——これは、一体どういう事ですか——？」

「いや、これは私としても想像がつかなかった。申し訳ないと思う。しかし、私の過失ではない」

喜多川祐介の眼前には、自らの絵があった。

己の全霊をかけて描いた、伊勢海老の数々。キャンバスに描かれた雄々しい紅の絵に、桃色が散乱していた。

樋口の着物も、桃色に染まっていた。

樋口は是非とも伊勢海老の絵を鑑賞したいと祐介に頼み、祐介は快くその願いを受け入れた。そうして様々に描かれた伊勢海老の絵の数々を樋口の部屋に運び込み——悲劇は起こった。

「誰が——誰が、こんな事を——」

「犯人は、もう解っている。城ヶ崎マサキ。映画サークル『みそぎ』の部長だった男だ」

「何故、こんな事を——！」

「何故、何故かね。何故と言われれば、そこそこに長い話になる。ただ、一言で表すならば——」

樋口は紫煙をくゆらせながら、言った。

「自虐的代理代理戦争、だ」

怪盗、再び

代理戦争という言葉が出始めたのはいつの頃であったか。イデオロギーという共通項を持ってしまった為に哀れ小国同士が大国の支援を受けながら撃つの撃たれるのを繰り返す悲劇的な代物を想像していた祐介は、その代理戦争の余りのくだらなさに呆気にとられた。

何処の誰が始めたであろうか解らぬ争いを後輩に引き継がせ代理させ、その争いを延々引き継ぎながら行っていたというのだから救えない。何と非生産的かつ無意義な戦いなのだろうか。

「こんな、下らない争いの為に——彼等は、こんな事になったというのか——！」

哀れ桃色に染められたその絵の数々に、祐介はむせび泣いた。彼等が生きた証こそ、この絵だったのだ。

それが、今や彼等の雄々しい紅色は、桃色に色褪せてしまった。

「城ヶ崎イイイイイイ!!」

かつて、班目のシャドウを目前にした瞬間の如く、祐介は吠えた。

城ヶ崎マサキ、許さぬ。

祐介は桃色に染まりし絵の前に、拳を強く強く握った。

★

「これは厄介な事になってしまったかもしれぬ」

「師匠、どうしたのですか？」

「これは、代理戦争を超えた戦いになるやもしれぬ」

樋口師匠は、そんな事を言った。

自虐的代理代理戦争——この下らない戦いの延長線上で桃色に染まりし浴衣を身に纏った師匠は何とも珍しい表情をしていた。

何かしらを、危惧している顔だ。

それは非常に珍しい光景であった。樋口師匠は、きつと一目見るだけでアリストテレスを憤死させる程度には、社会的生物としての本懐を喪ってしまっている男だ。あらゆる事象に泰然自若の態度を崩さず、全てを受け入れる度量を持ちすぎってしまったが故に大学八回生と云う不名誉を背負ってしまった男である。

そんな男が、未来の心配事をしているのだ。

それはきつと、嵐などという形容では収まりがつくまい。嵐程度で師匠がこんな表情をする訳もない。

「喜多川祐介——彼を本気にさせてしまった。これは大変な事になる」

「何があったというのですか」

私がそう尋ねると、師匠はあっさりとこれまでの経緯を話した。

「そりゃあ、怒るでしょう。当たり前の話だ。彼は見た所美術家みたいであるし」

喜多川祐介は美術家だ。いくら常識の埒外の脳内構造をしていようと、自らの作品に対する愛着は美術家であるならば言うに及ぶまい。それをこんな下らない争いの最中に汚されたというのならば、怒り猛るのも無理はない。

「貴君。君は直接彼の眼を見た事はあるまい。彼は確かに美術家であろう。だがその本質は——叛逆者だ」

「叛逆者？」

「如何にも。美を追求するがあまりその本質をあまり出さぬのであるうが、彼はその心の中に叛逆の心を持っている。自らの怒りを受容しつつも、その報いを与えん事に一切の躊躇を持たぬ狼の如き猛き心魂だ」

「そうなのであろうか？」

喜多川祐介なる人物は、時折見かけると挨拶する程度の関係である。それでもその心意気はひたすらに真つ直ぐである事は理解出来る。ただ、我々とは違う角度で真つ直ぐなだけで。

叛逆者などという物騒極まりない心を持っていると言われても、やはり疑問を抱かざるを得ない。

「なに、これより先を見れば解るさ。我々はただその帰結を見る他ない」

★

それから、およそ四日後の事。

喜多川祐介は夜の通りを密やかに疾走していた。

影から影へ、誰にも見つかる事無く俊敏に動きながら。

かつて、怪盗だったころ、彼等を率いしリーダーの動きに付いて行きなから体得した移動法だ。シャドウすらも欺くその歩法に、気付けるものはいないであろう。

彼の顔面は、狐の仮面に覆われている。

向かう先は、ただ一つ。

城ヶ崎マサキ。彼の住処へと

その手に携えるは、かつて一世を風靡した予告状。元より、予告状のカードのデザイン制作は祐介が行っていた。作成に何も問題なぞ無かった。

「我が名は、フォックス」

和装を拵え、仮面をつける——今の彼は喜多川祐介ではない。たった一人の、怪盗だ。

「貴様の『オタカラ』。頂戴するぞ——城ヶ崎」

闇の中、フォックスはそう呟いた。

狐と妖怪

これは、喜多川祐介が城ヶ崎マサキの住居へ向かう二日前——つまり、事件から二日後の事。

祐介の動きは迅速であった。

——樋口氏の留守を、城ヶ崎に漏らした者がいる。

樋口と言う男は形式上学生としての身分を持っているようだが、もはやその実質はほぼ喪われているも同然の男だ。仕事もしている様子もなく、成程確かに仙人という形容は中々の的を射ている。——ここで、疑問が生じた。城ヶ崎はどのように樋口氏の留守を知ったのであろうか、と。

あの男は実に気分屋であり、決まったルーティンを以て生活している訳ではない。外出の時間をピタリと当てて悪戯行為をするのは中々に困難な事ではないだろうか。

最初は、城ヶ崎が樋口氏の住居を監視し、外出時を見計らって仕掛けたのではないかと疑ったものの、樋口氏いわく「彼はそれほど我慢強くも無ければ暇でもない」というではないか。その言葉を信じるならば、——間違いなく、樋口氏の外出を城ヶ崎に漏らした者がいるはずである。

祐介は、まずもってそのスパイを追う事にした。

★

小津は、人通りの少ない夜の住宅街を歩いていた。

歩く者が淑女乙女であるならば「これこれ、夜の一人歩きは危険だぞ」と注意の一つでも受ける場所だろう。人の恨みは腐るほどに買ってきた男であるが、それ故彼は女鹿の如き臆病さと危険察知能力を持つている男でもある。夜の通りを歩くに辺り、闇討ちの気配あらずぐさま逃げ出せる準備は出来ていたはずであった。

——その夜、彼はその鍛え抜かれた危険察知能力に掠りもしない影に、背後を掴まれていた。

「——振り向くな」

低く、鈍く、重い声。

幾多もの修羅場を潜り抜けてきたのであろうか、凄まじい圧力を伴った冷たい男の声が、小津の背後から聞こえてきた。

小津は悪辣な計画を立てるだけの底意地悪さは持っていて、残念ながらこの圧倒的な雰囲気跳ね返せるだけの度胸も根性も無かった。

それでも、何とかかなけなしの甲斐性を振り絞り、小津は喉奥から絞り出すように言った。

「こんな事して、どうなるか解っているんですか」

しかし、帰ってきた言葉は何処までも冷淡な返しであった。

「——どうなるか解らないのはお前の方だ、阿呆め」

小津を掴むその男は、すぐさま服の中から小津が所有するノートを盗み出す。凄まじい手練れの動きで、手が身体に接触した感覚が無かった。

「あ、何をするんですか!」

「お前がどういう人間か、ある人物から聞き出した。恋の予感あれば謀略巡らし破綻に追い込み、強者にへつらい、しかして強者を弱者に陥れる事に微塵の躊躇も抱かぬ卑怯者。——その全てとは言わんが、一部がこのノートに記されているのだろう」

今盗まれたノートには、小津があらゆる情報網から吸い上げた様々なデータが記されており、転じて彼が仕掛けた謀略の重大なる証拠である。

「このノートが世に公開されればどうなることか。今まで自ら表立つ事無く過ごしてきたのであろうか——謀略に関わった者全てがお前の敵となる」

小津の背筋に冷たい感覚が走った。

「どうなるだろうな? 馬に蹴られ挽肉になるもよし、賀茂大橋から沈められるもよし。——どう転ぼうと、お前の大学生活もこれにて終焉。果てしなく正しい因果応報がここに行使され、お前は誰もが祝福しながら死を迎える」

ひい、と小津は呻く。

「——別に俺はお前のこの先なんぞに興味も無い。怨みも無い。故

に——質問に答え、誰にも今夜の事を喋るな。そうすればこのノートは返してやる」

小津はそれから流れる様な口調で全てを打ち明けた。自らが城ヶ崎と樋口との二重スパイである事、城ヶ崎の住居にスケジュール、そして城ヶ崎の「オタカラ」——等々。

約束通り、背後の男はノートを地面に投げ捨て、そのまま影となり消えていった。

小津は、解放された瞬間、一瞬だけその姿を垣間見た。

狐の仮面を付けた男であった。

★

「ふむ、上手くいったな。流石は——ジョーカーだ」

小津を脅した一連の行動——アレは、怪盗団のリーダーを真似たものであった。

あの男は異界の怪物すらも、恐怖を植えつける口八丁を駆使し、交渉を行ってきた。

怪物を己が配下にする為、もしくは単純にカツアゲする為——命乞いしてきた相手を見せつけるように叩き潰し、見せしめにする事すらあった。

「本当にあの男には頭が上がらない——」

現在祐介は自宅にて工作活動中である。

キーピックに始まり、煙幕、かんしゃく玉——火炎瓶も作ろうかと思ったが、流石に火事は大事になる為やめておいたが、それでもレシピは持っている。全て、ジョーカーから頂いたものだ。

曰く「モルガナに唆され作ってみたらハマってしまった」「怪盗行為の為に必要な事だった」「川上をはじめヴィクトリアのメイド達についてこれ位作れる。別におかしなことじゃない」等々、あっけらかんと言いつつ放っていた。流石は九股を敢行できるだけの度胸と能力を持っている男だ。手先も凄まじく器用なのだなど感心してしまうばかりだ。

「準備は出来た」

必要なモノはすべて用意した。

後は——成すべきを成すだけだ。

人形の美

城ヶ崎は吉田山のふもと、吉田下大路町に住んでいる。最近改築されたのだろうか、真新しいアパートだ。

祐介は付近の竹藪に潜みその様子を見ていた。

——奴には、直接引導を渡さねばならぬ。

どうやら城ヶ崎はサークルを追放されて随分と暇が出来たようで、自宅にいる事が多くなってしまったようである。それでいて自虐的代理代理戦争で悪戯をされる可能性もある。それ故彼は随分と自宅に引き籠る事が多くなってしまったのだという。

祐介は彼が住む二階の部屋を見る。まだ明りが付いている。

——作戦決行だ。

★

城ヶ崎は玄関口の宅配入れがガタン、と鳴り響く音を聞き咎める。

——野郎、また何かしら仕掛けたのか。

城ヶ崎はゆつくりと玄関口へと近づいて行く。

そこに差し込まれてあったのは——炎を象った顔にシルクハットを被せたカード。その裏を見れば、何事かが書かれている。

——城ヶ崎マサキ。悪辣と強欲の化身よ。貴様のオタカラを頂戴致す。

ただそれだけが書かれたカードを、怪訝な表情で城ヶ崎は見やつた。

これを見てピンと来ない者は、余程世間に興味ない者だけであろう。かつて金メダリストを、芸術家を、マフィアを、企業社長を、そして——総理の頂まで登らんとした者すらも、改心させた集団、
“怪盗団”。

——こんな手のかかる悪戯を、樋口がするののか？

この自虐的代理代理戦争は下らない争いを延々と続ける事こそが本懐である。本腰を入れる事それすなわち代理戦争にあらず。まるで、神すらも失笑しか浮かばぬであろう下らない次元を保持してこそ、この争いだ。怪盗なる存在を匂わせ事態を大事にさせることは、

この争いの本懐では無かろう。

そう疑問が頭に掠めた瞬間、外で破裂音が間断なく響いた。

城ヶ崎は何事かと思わず玄関口を開けると、その瞬間凄まじい煙がその間より入っていく。

ゲホゲホと咳き込みながら周囲を見ると、そこに動く影が見えた。

この野郎、と吠えながら城ヶ崎はその影を掴まんと腕を伸ばす。しかし、その瞬間には城ヶ崎は足に何か引掛かっていた。

城ヶ崎は体のバランスを崩しながらも、その姿を一目見んと必死に煙幕の中部屋の中へと突っ込んでいく。げふ、と情けない声と共に身体を転ばせ、見たのは——開け放たれた窓のみ。

城ヶ崎は反射的に壁にいる自らの恋人を見る。

この短時間で盗む事は不可能と解つていても、それでも一応見る。彼女は、確かにそこにあつた。

ならば、なにか別のモノが盗まれたかもしれぬ。——追わねば。

城ヶ崎は窓を閉め、玄関口の鍵を閉めると、外へ駆けだしていった。

——実は、アパートの陰にひっそりと犯人が潜んでいる事など露にも思わず。

★

主のいなくなったアパートの扉を、キーピックで開け、入る。

そこには、一人の女性がいた。

——まるで、本物かと思紛うばかりに美しい、女性の人形。あの男の恋人であり、何より愛する事物。

見た瞬間——祐介は心奪われた。

美しい。

ただそこに存在するだけの、物言わぬ人形。しかし人形故に恐ろしく完成された伶俐な肢体と、人形にはあり得ぬ温かみを孕んだ瞳。ラブドールを心より愛する男と聞き何事かと顔を顰めたが——あの男は、確かな審美眼を持っていたのか。この美しさたるや、サユリにも引けを取らぬ

祐介はジツとその姿を眺めた。

——あの男は、きつとこの人形を愛しているに違いない。

彼は彼女を情愛ではなく、芸術として愛しているのだろう。そこに存在し、物言わぬ彼女と心を通じ合わせて。

——ここで、怒りに任せこの女性をさらう事は、まさしく俺も班目と同類になる事と同義だ。

人の芸術を、愛する美を、虐げ奪う、それはあつてはならぬ侮辱だ。「仕方あるまい」

この物言わぬオタカラは諦めた。これは盗んではならぬ。

「しかし、報いは受けてもらう」

祐介は、城ヶ崎の下着の入った箆笥を開け放った。

★

その三日後。実に不思議な現象が巻き起こった。

大学の敷地——特に映画サークル「みそぎ」の部室周辺のキャンパスに、見事な墨入れで「城ヶ崎ここに見参」と書かれた桃色ブリーフが空を舞っていた。

桃色の布地は各キャンパス内に張り巡らされた鉄柱に括られた籠の中に設置され、キャンパスに人が集まる時間帯になると同時に籠がひっくり返った。

その日は、見事な強風の日であった。

桃色が空に舞い、何事かとその手に掴めば桃色に染められたブリーフと、城ヶ崎の墨入れ。

男共の爆笑と女子諸君の悲鳴を誘ったその事件は新聞部・学生自治会によって派手に取り上げられ、詭弁論部の公開弁論において「桃色が空に舞う事への修辭的論法」という論題で会議が行われた。残念な事に、城ヶ崎はこの三日間の間、大学の知り合いに「下着が盗まれた」と憤慨気味に語っており、その事もまたそのブリーフが真正正銘の彼の代物である事が確定的事実となってしまうたのである。

——かくしてこれより長年に渡る因縁が出来上がった。

城ヶ崎マサキと怪盗フォックス——喜多川祐介との。

相島の疑念

あの城ヶ崎との仁義なき戦いは、静かに、しかし何処までも広く、波紋を広げた。ある者は好奇心に目を輝かせ、ある者は表面上せせら笑いなながらも薄ら寒い恐怖を抱えていた。

例えば、現在、映画サークル「みそぎ」から城ヶ崎を追い出すことに成功した福猫飯店所属の相島などもその一人である。

城ヶ崎が痛快極まりない方法で社会的制裁を叩き付けられたことは愉快極まりない出来事であったが、彼が持つ情報筋によってある物騒な話題が耳に入ることとなる。

――怪盗。

悪党の心を盗み、改心する「心の怪盗団」

その存在はおろか実態すらも掴めぬその集団は、様々な悪党の心を盗んでは叩き切った。その悪党共の悪辣さたるや空いた口に粘土細工を詰め込まれたかのごとく呆れ返る悪行三昧であり、生徒への暴行、強姦に始まり剽窃、詐欺、脅迫、様々な労基法違反、等々。彼等に暴けぬ罪はなく、彼等はまさしく大衆が望みし義賊であった。

――恐らくは愉快犯には違いあるまい。怪盗団が改心させてきた悪党共

に城ヶ崎を比肩できるなぞ誰も思うまい。それに、今回の事件の如き直接的な手段を怪盗団は取らなかつたからこそ、奴等は結局尻尾を掴ませなかつたのだから。

確かに城ヶ崎とは実にくだらない男である。女の乳とラブドールをこよなく愛する変態であり、サークルを私物化し我が城としていた阿呆であり、それ故――相島にクーデターを起こされサークルから追い出された愚か者でもある。しかしながら、あのメディアを騒がせた海千山千の百鬼夜行共と城ヶ崎を同列するには明らかな小物である事は間違いない。

それを狙うとならば明らかな小物狙いの愉快犯。しかしそれ故面倒でもある。

なぜなら――相島は決して認めないであろうが、相島自身が他に

形容しがたい小悪党で小物であるからだ。大物ぶっていても、所詮は福猫飯店の権威を傘に私欲を満たす恐ろしく小さな気概を抱えた男だ。そんなみみっちいしけた予想を誰よりも早く行える程度には完成された小物である。それ故、城ヶ崎を狙う程度の愉快犯には格好の獲物であると自ら本能的に予想できた。

相島は方に一つも狙われる事はあるまいと心中で幾度も唱えながら、しかして心中に根付く小物精神が警戒しろと叫んでいる。

「おい」

「はい。どうかなきいましたか？」

「――城ヶ崎の事件を調べろ。徹底的にだ」

福猫飯店は学生のあらゆる情報を手中にした組織である。

――かような愉快な出来事を引き起こした阿呆一人、見つけれない訳がない。相島は実に小物の笑みを浮かべていた。

★

不細工であったかな、と喜多川祐介は思った。

奪った下着の全てを桃色に染め上げ大学構内に撒き散らす――それはとっさに思い付いた策ではあったが些か下品であったのだろう。無論、美術家たるもの、あらゆる事象に美を追求せねばなるまい。あの事件も彼なりに美を追求した結果でもあるのだ。

彼の頭の中では純青の空の中、強風に踊る桃色ブリーフの絵は実に美しい光景であると思っていた。大学構内の人間もさぞ感嘆の溜息を吐き出すに違いないと内心ほくそ笑んだのであるが――巻き起こったのは散々たる爆笑の海に木霊する女達の悲鳴のみ。

何が足りなかったのか？祐介は思考する。

――風が強すぎたのか、それともブリーフに刻んだ墨入れが仰々すぎたか。

うむ、あの時は色々な事が重なって、冷静な思考が出来なかったのであろう。ならば仕方あるまい。

伊勢海老を汚された怒り、そして名も知らぬ人形と出会った衝撃。

この二つが、美術家としての思考を混沌の海の中に誘い込んだのである。

あの夜に見た人形の姿はよく覚えていた。

いつか、彼女を描いてみたいものだ。そう祐介は純粋に思った。

一つ絵を仕上げると、何だか腹が減ってきた。

「さて、どうするか」

財布の中身はどうにもならぬ。それ故腹の中身もどうにもならぬ。一語訳ではない。この世には、世間が見向きもせぬ食い物に溢れている。毒さえなければ基本的に何だって食える事を世間は知らぬのだ。そこらに生えている雑草も、川辺に歩くちみたまも。

空腹の最中、神はきつと何処かで見ている。理解してくれている。飢えぬよう、世界の何処かに食えるものを置いてくれている。ならば、いざ行かん。

そうして、喜多川祐介は部屋を出た。

腹を満たすために。